

親子間の価値意識と子育て支援 (2)

後藤 ヨシ子

(平成 17 年 10 月 31 日受理)

Value Consciousness between Parent-Child and Support for Child Care (2)

Yoshiko GOTO

(Received October 31, 2005)

はじめに

子どもは日々発達・変化し子どもの精神内界も年令とともに次第に複雑にかつ外面からは推し計れないものとなってくる。子ども理解においては、ありのままの心の世界や心の流れを把握し、心の年齢的発達の特徴や子どもの取り巻く環境の変化を理解する、また子どもの立場にたってその子自身があたかも感じたり、体験したりしているような見方で、すなわち共感的な理解とそれも全人的にとらえることが望まれる。子ども理解にはさまざまな立場からの測定・評価がみられるが、今日の子ども理解において、親（大人）の考えや常識、判断基準が子どもに通用しなくなってきたともいわれる。子どもとの考えや常識の相違に敏感に気づくことも必要であろう。一般的に「常識」とは、同じ社会・文化の中で同じような時代を生きた人々の心の中には「この場面では、このように振舞うもの、このように考えるもの」といった暗黙の共通した価値観や知識や行動様式が流れている。ひとりのものの見方、考え方、行動の仕方は共通した一定の制約をうけていることによって、その限りでは他者と分かりあえる（理解しあえる）、他者の心が読める、他者の行動を予測できるといった心と心のコミュニケーションができ、社会の秩序はみたされ道徳的規範もくずれることがないと思われる。しかし、現在子どもたちはあふれる情報のなかに生きており、親（大人）が子どもに求める価値観や常識をそのまま率直に疑うことなく受け入れるという環境にはない。

今回は、子どもの「考え方・常識」と親の「考え方・常識」にどのような事柄や内容面に相違があるかを検討し、児童・生徒期の子ども理解と対応、子育て支援について考察した。

研究方法

対象は、長崎市内の小学校 5・6 年生 148 名（男子 72 名、女子 76 名）、中学校 1. 2 年生 107 名（男子 49 名、女子 58 名）、県立高校 2 年生 168 名（男子 78 名、女子 90 名）、

計 423 名 (男子 199 名, 女子 224 名) とその保護者である。

調査内容は, 子どもと保護者双方に自由記述法により回答を求めた。質問は

○児童・生徒に対しては, 考え方や行動について, 子どもの立場から「あたりまえ」と思っている事柄が, 親の思っている「あたりまえ」と大きく違うと感ずることがあります。具体的にどのような内容(考え方・服装・行動面)ですか。いくつでもよいです。

○保護者に対しては, 今日, 親の「考え方・常識」と子どもの「考え方・常識」に違いがあるといわれますが, 具体的にどんな事柄・内容面(髪・服装・行動面など)にあると思えますか。いくつでも結構です。と質問し記述を求めた。

実施時期は, 2002 年 7 月～9 月である。

結 果

1. 反応語にみる「考え方・常識」の相違

児童生徒期における反応語種数及び反応語総数は, 表 1 にみるようにいずれの学年においても, 親の方が子どもよりも多い。また小・中・高校の発達段階別では, 小学生・高校生は, 「特になし」の回答は子ども・親ともにその割合はとても高いが中学生では, 子ども・親ともに反応語総数は多く, 他方「特になし」の回答は少なかった。

表 1 対象・反応語数

| | | 小学生 | | | 中学生 | | | 高校生 | | |
|----------|----------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
| 児童 生徒 | 人数(N) | 72 | 76 | 148 | 49 | 58 | 107 | 78 | 90 | 168 |
| | 反応語種数 | 18 | 31 | 49 | 32 | 27 | 59 | 32 | 30 | 62 |
| | 反応語総数(A) | 89 | 114 | 203 | 87 | 96 | 183 | 104 | 131 | 235 |
| | A/N | 1.24 | 1.5 | 1.37 | 1.78 | 1.66 | 1.71 | 1.33 | 1.46 | 1.4 |
| 親 | 反応語種数 | 38 | 43 | 81 | 49 | 45 | 94 | 65 | 48 | 113 |
| | 反応語総数(A) | 109 | 132 | 241 | 98 | 107 | 205 | 147 | 146 | 293 |
| | A/N | 1.51 | 1.74 | 1.63 | 2 | 1.84 | 1.92 | 1.88 | 1.62 | 1.74 |

反応語は 12 種類に分類をした。つまり①「流行」(服装, 髪型・髪を染める, 服飾, 流行の物等), ②「学習面」(勉強・学習時間・学習の仕方, 塾, 努力すること, 将来・進路, 学校生活等), ③「遊び」(遊び方, 遊び時間, テレビ, テレビゲーム, スポーツ, 遊び内容等), ④「人間関係」(友達関係, 異性関係, 目上の人, 親子関係等), ⑤「礼儀・行儀」(言葉遣い, 略語, 挨拶, 礼儀, 行儀等), ⑥「携帯・持ち物」(携帯電話, 持ち物等), ⑦「金銭感覚」(お小遣い, 高い物を買う・金銭感覚等), ⑧「考え方」(人やものなどに対する考え方, 価値観等), ⑨「行動・性格面」(思いやり・忍耐, 自己決定, 外泊する, 性格や行動面等), ⑩「生活面」(帰宅時間, 夜の外出時間, 休日の過ごし方, 門限, 手伝い等), ⑪「規則・道徳・教訓」(人に迷惑をかけない, 規則を守る, 道徳心等)そして, ⑫「特になし」の 12 種類である。なお生の言葉は図 4～9 のマップに示されている。

1) 「考え方・常識」の内容をしてみると, 児童生徒からは, 小・中・高校生いずれの学年においても, 服装や髪型等の「流行」に関して親との相違が大きいことをあげておりそれは親においても同様であり「流行」を指摘している。中でも中学生のその割合は親子

ともに高い（約40%）。次いで子どもが親との相違があるととらえているのは、小学生では「学習面」・「遊び」, 「考え方」をあげ、中学生も「学習面」を指摘し、続いて「考え方」, 「金銭感覚」をあげ、高校生では「考え方」や「人間関係」そして「生活面」について親との相違をあげている。子どもにとっては「流行」に対する感性や取り入れは親世代とのぶつかりを生じ、また勉強や努力すること・将来の進路に関する「学習面」では、親との立場の相違として現れ、特に受験期の子どもの中の重くのしかかっていると思われる。

一方、親からみて子どもとの相違については、いずれの学年においても「礼儀・行儀」を強く指摘しており、親子間の考え方や常識の相違が顕著に現れている。また小学生の親では「遊び」や「行動・性格面」をあげ、中学生の親では「行動・性格面」, 「金銭感覚」そして「人間関係」を指摘し、高校生の親は「考え方」, 「行動・性格面」, 「人間関係」や「生活面」をあげている。殊に親にとって「礼儀・行儀」は子どもの考えや常識と大きく相違があること、また「行動・性格面」等、子どもの発達の特徴の理解に懸念やとまどいを生じる親の姿でもあるようである（表2, 3）。

表2 「考え方・常識」の相違（児童・生徒）

| | 小学生(%) | 中学生(%) | 高校生(%) |
|----------|--------|--------|--------|
| 流行 | 20.3 | 40.2 | 17.9 |
| 学習面 | 10.8 | 20.6 | 8.9 |
| 遊び | 10.8 | 13.1 | 3.6 |
| 人間関係 | 4.1 | 6.5 | 10.1 |
| 礼儀・行儀 | 4.1 | 11.2 | 3.6 |
| 携帯・持ち物 | 1.4 | 5.6 | 4.2 |
| 金銭感覚 | 4.7 | 18.7 | 2.4 |
| 考え方 | 10.1 | 19.6 | 16.1 |
| 行動・性格面 | 4.3 | 16.8 | 1.3 |
| 生活面 | 5.4 | 14.0 | 9.5 |
| 規則・道徳・教訓 | 1.4 | 0 | 0.6 |
| 特になし | 58.2 | 16.8 | 56.5 |

表3 「考え方・常識」の相違（親）

| | 小学生親(%) | 中学生親(%) | 高校生親(%) |
|----------|---------|---------|---------|
| 流行 | 23.0 | 39.3 | 32.1 |
| 学習面 | 7.4 | 3.7 | 1.9 |
| 遊び | 16.2 | 4.7 | 0.6 |
| 人間関係 | 6.8 | 21.5 | 13.7 |
| 礼儀・行儀 | 21.6 | 33.6 | 22.0 |
| 携帯・持ち物 | 4.7 | 3.7 | 4.2 |
| 金銭感覚 | 7.4 | 24.3 | 7.7 |
| 考え方 | 10.8 | 12.1 | 15.5 |
| 行動・性格面 | 15.6 | 30.8 | 14.3 |
| 生活面 | 4.7 | 12.1 | 12.5 |
| 規則・道徳・教訓 | 5.4 | 14.0 | 4.8 |
| 特になし | 39.2 | 6.5 | 36.9 |

2) 「親子双方」が「考え方や常識」に相違があると認識している、いわゆる割合がほぼ同じである項目・内容をみると、小学生では親子ともに「流行」と「考え方」である。中学生では親子ともに「流行」であり、それに関する反応語数も多い。高校生では親子ともに「考え方」についてである。

3) さらに「考え方・常識」に相違があると「どちらか一方、親あるいは子どもが強く意識している場合、いわゆる割合において親子間に相違が強くみられる項目・内容であるが、子どもの側からみた場合、親よりも強く意識している項目・内容は、小学生にはみられない。しかし中学生では勉強・塾・将来・進学等に関した「学習面」や「遊び」, 「考え方」の面に、高校生では「学習面」に関し親よりも強く相違を意識している

他方親の側からみた場合、子どもよりも強く意識している項目・内容は、小学生の親は「礼儀・行儀」に強く相違があり、そして「行動・性格面」, 「遊び」をあげている。中学生の親も「礼儀・行儀」に相違の意識は強く、また「行動・性格面」, 「人間関係」, 「規則・道徳・教訓」をあげている。高校生の親は小・中学生の親と同じく「礼儀・行儀」に

関する意識は強く、そして「流行」、「行動・性格面」をあげている。いずれの学年においても親の意識は共通して「礼儀・行儀」に子どもとの相違が強く示されている(図1, 2, 3)。

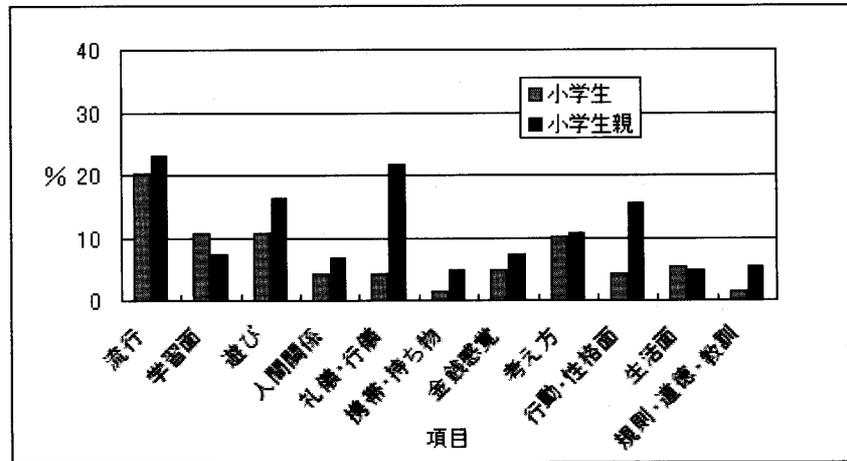


図1 「考え方・常識」の相違 (小学生・親子)

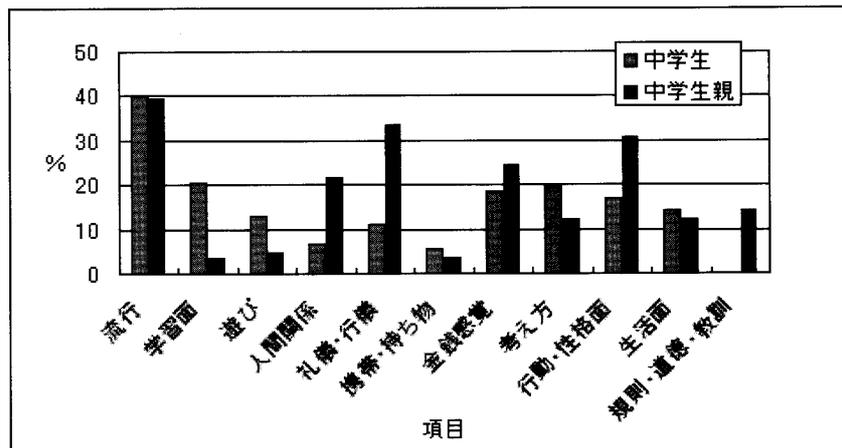


図2 「考え方・常識」の相違 (中学生・親子)

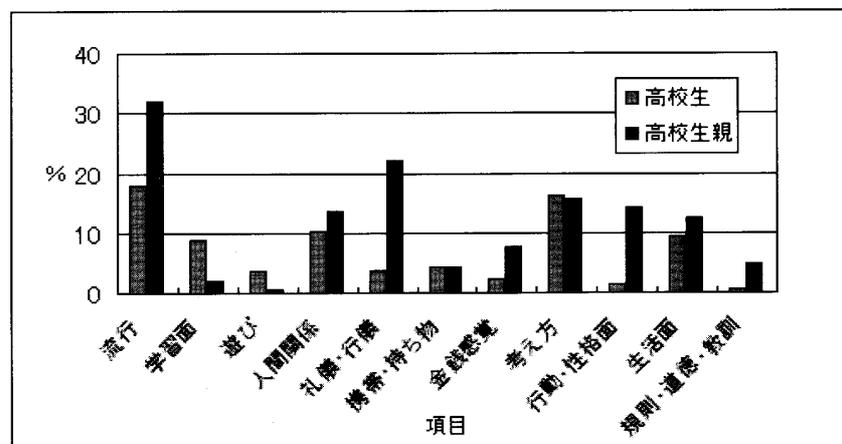


図3 「考え方・常識」の相違 (高校生・親子)

2. 反応語マップにみる「考え方・常識」の相違

自由記述によりえられた反応語である“生の言葉”をマップ(図4, 5, 6, 7, 8, 9)に示している。今回は小・中・高校生男子の親子についてのみ示しているが、反応語の内容・言葉を具体的に見ることができる。上方の位置に子どもの反応語マップ, 下方の位置に親の反応語マップを示している。円の中央に近い程, 同じ反応語(内容・言葉)の数が多いことを示しており, 最も外側の円では1人の反応語であることを表している。視覚的にも中学生の反応語総数が小学生や高校生よりも多いこと, また小・中・高校生いずれも子どもよりも親の反応語総数の多いことがわかる。それはエントロピーの値の大きさにみることができる。なお小・中・高校生女子の親子についても同じ傾向であった。

おわりに

今日文化・社会の変化の中で多様に異なる考え方や常識がとびかい「どのものさし」が共通しているのか境界線が曖昧になっている。そして常識の意識・行動面における世代間の相違, 親世代との文化的すれ違いを生じていることも事実である。親子間の考え方や常識の相違は時代の中で急速に変化している子どもの現実を大人が見ようとしないところに要因があるともいわれる。事実子どもとの「文化的すれ違い」がある。流行文化, 氾濫する情報やマスメディアの影響, 通塾生活そして将来への不安や社会への不安からまって子どもの生活や意識面での質的变化が, 親世代との文化的すれちがいを生じている。

今回の結果においても, 親子間の「考え方・常識」の大きな相違は「流行」を指摘している。子どもの流行に対する感性や方法には親(大人)とは異なり, 子どもの方が敏感であり, 服装, 髪型, ピアス等に見られるように, すぐに取り入れをする。そこに親(大人)はとまどいやゆれ, 子どもと常識とのぶつかりが生じる。また子どもにとっては, 重圧となっている「学習面」, 特に中学生や高校生にとって強い受験への重圧があると推しはかることができよう。子どもにとっては競争教育に疲れても心身ともに安心して癒しのできる安心感や信頼感のある居場所が家庭, 学校, 地域の中に必要である。

他方, 親は子どもとの相違について, 強く言葉遣いや挨拶といった「礼儀・行儀」をあげている。このような一般的にいう形式的な常識は, 日常的な生活の中で, 見よう見まねで覚えるものであることを考えると, 今時の子どもに常識があるとかないとかということとは, まさに親(大人)の常識の問題であるといえそうである。親(大人)の考える常識は押しつけではうまくいかないけれども, 日常生活の中で親子関係性の中で, 子どもにどう常識的生活様式を伝えていくか(文化の伝達), それはどんなに時代が変わろうとも何を大事と考えるか, 不易の部分についてどう伝達していくかということでもある。

そして親子間に見られる「考え方・常識」の相違は, 子どもの成長の一過程の現象とみるか, 子ども時代の体験にとって欠かせないものかどうか, それは子どもの人格形成にとって, 心の成長, 健全, 豊かさを育むこととどのように関連し, つながっているか等, ささまざまな視点から, 何をあたりまえととらえ, また大事と考えるか。親子間の常識や価値意識のズレの解決は必ずしも容易ではないが, 新しい判断基準をどこにおいたらよいか, 今日の価値観や常識を瞬時に感じたり, 体験する文化・多価値観の社会では, いっそう一人ひとりの「ものさし」を問いなおしてみるということが問われているといえる。その問いなおしの中から新たな発見と創造が, 子どもとの文化的交信を一段と可能にしていくように思える。

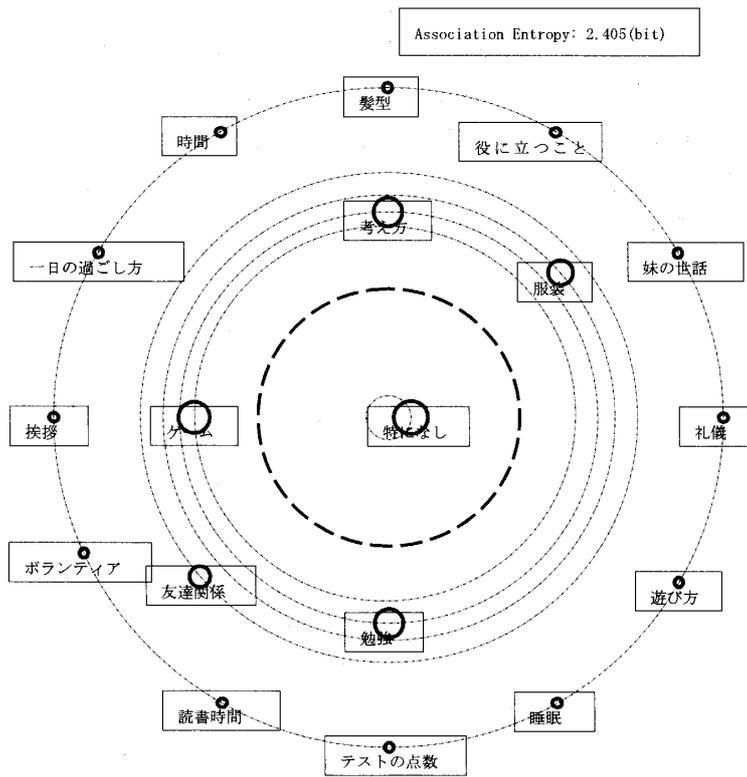


図4 「考え方・常識」の相違 (小学生・男子)

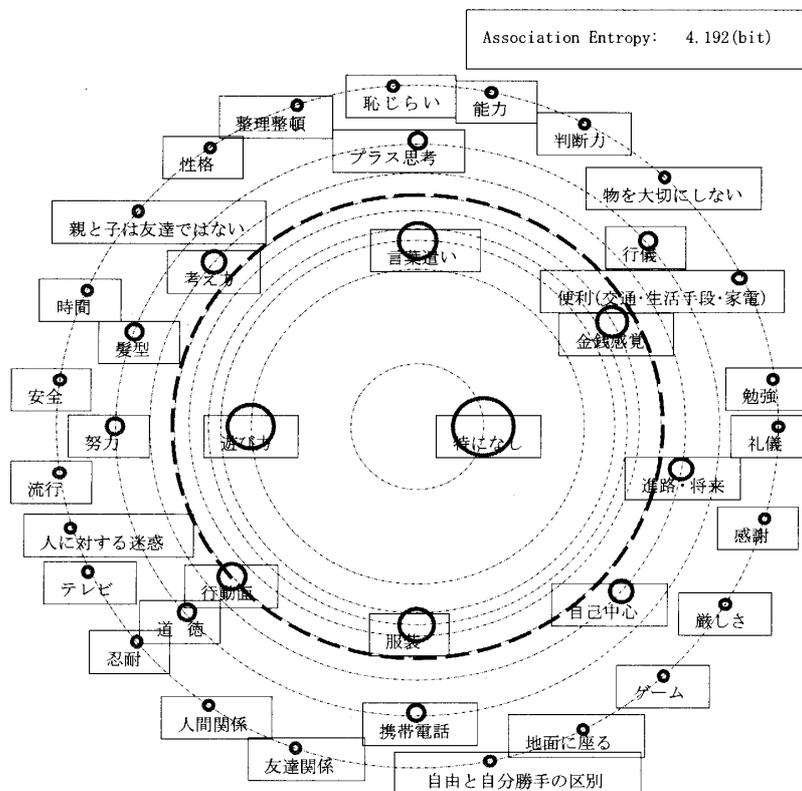


図5 「考え方・常識」の相違 (小学生・親)

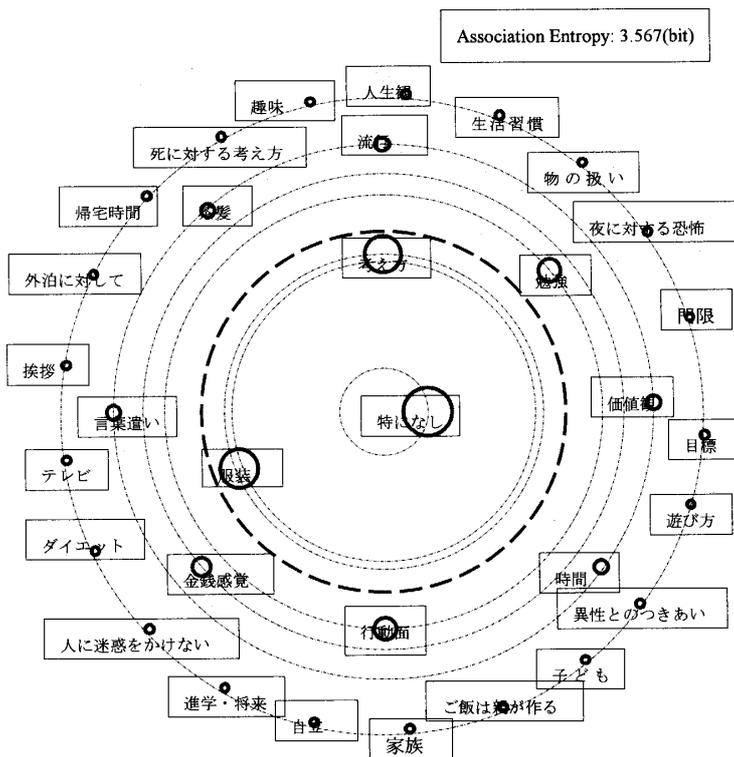


図8 「考え方・常識」の相違 (高校生・男子)

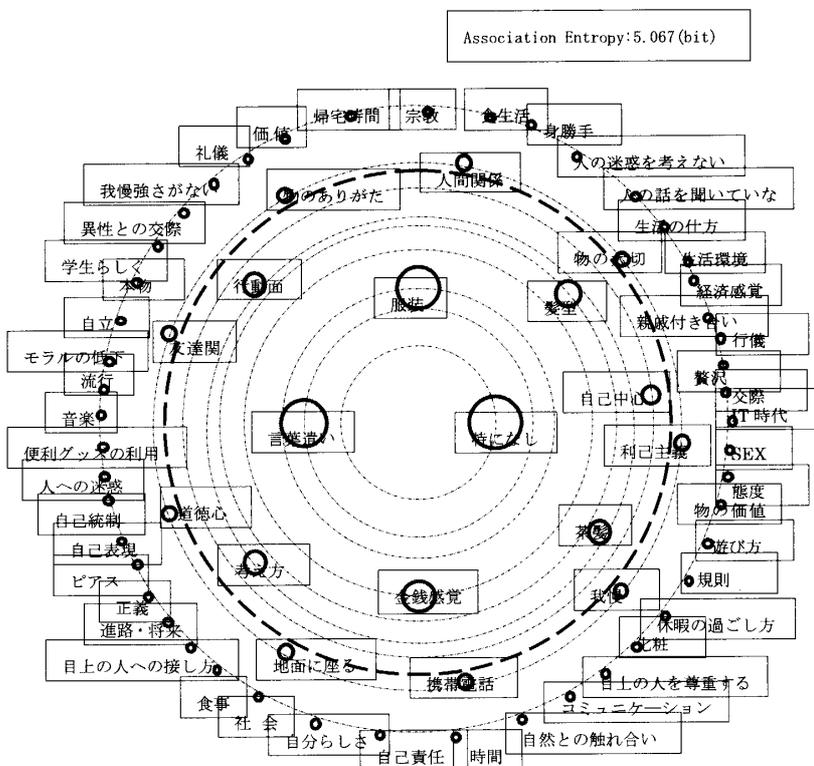


図9 「考え方・常識」の相違 (高校男子・親)

謝 辞

本研究の一部は、日本学術振興会平成15年度科学研究費補助金（基礎研究（C）（2）, 課題番号15530596）の助成を得て進められた。記して感謝の意を表します。

文 献

1. 岡崎 勝：今どきの小学生の常識 教育と医学 48(10) , 26-33, 2000.
2. 丸野 俊一：編集後記 教育と医学 48(10), 97, 2000.
3. 全生研常任委員会編：荒れる小学生をどうするか 大月書店 1998,
4. 田中 孝彦他編代表：中学生の世界1・2 大月書店1999.
5. 山村 賢明：多様化・流動化する価値観と子どもの教育 児童心理 36(5), 33-43, 1982.
6. 後藤 ヨシ子他：親子間の価値意識と子育て支援 長崎大学教育学部紀要 教科教育 (42) 59-64, 2004.
7. 山極 隆：不易と流行をどう考えるか 総合的な学習の実践 No1, 28-29, 1997.
8. 有田 和正：指導に結びつく「子ども理解」を 児童心理 48(4), 21-28, 1994.